

武蔵野日曜聖書講筈

黄金律

——マタイ伝第7章12節——

1987年12月13日

小池辰雄

旧約聖書の根本精神 汝の隣を愛すべし マキシミアノ・コルベ神父 最後のしかし 霊愛
道 生命がけ 自己教育 暖かい楽しい思い出 三つの畏れ (参考)『黄金律』

【マタイ7】

12 然らば凡て人に為られんと思うことは、人にも亦その如くせよ。これは律法
なり、預言者なり。

●旧約聖書の根本精神

「黄金律」は、私は前に『エン・クリスト』誌第14号(1983年5月刊)に書いてありま
すから、家に帰ったら、お読みになってください。私の今度の著作集第十卷(『聖書は大ドラ
マである』)にも、「黄金律」は9月19日のところに書いてあるので、後でそれを読みますが、
その私の訳は今ちよつと先に読みます。これはギリシヤ語に即した訳です。

「それゆえ人々が汝らになさんことをおよそ願うかぎりのことをその如く人々
になせよ。これこそが律法であり預言者たちである。」(マタイ7・12 私訳)

これが直訳です。文語訳の今までの訳は、

12 然らば凡て人に為られんと思うことは、人にも亦その如くせよ。これは律法
なり、預言者なり。

と、スラツと訳してありますけれども。

私たちは、中学校のときに論語で教わった孔子の言葉には、

「己れの欲せざる所、人に施すこと勿かれ」

自分が欲しないことは人にしてやるなど、否定の方です。キリストの言葉は、

「人にされたいと思うことを人にしてやれ」

と、肯定的な言葉です。旧約聖書の「トビアス」という外典があるが、そこには、

「汝に嫌なことは、それを誰にもするな」(トビアス4・16)

という句がある。これはむしろ孔子の方に近い。

「してもらいたいことを人にしなさい」

という。してもらいたいことはいろいろあるわけです。少年時代は少年時代、青年時代は



青年時代、いろいろその時期によって内容は違う。誰でも、期待というものがあるわけで、「そのように人にしてあげなさい」

と。キリストはひとつも年齢のことも、内容のことも、何も限定をなさらない。キリストの言葉は大体そうですね。無限定な絶対的な言葉です。それをどうとるか、これを受けとる人の側による。そこがキリストの言葉の素晴らしさです。非常な弾力性をもっているでは、

「人を殴りたいと思ったら、そのように殴らせろ」

ということにも、いろいろなるわけですが。

12節の後は、

「狭き門より入れ」

ということが書いてあるし、その前は、

「神さまは一切のものに雨を降らせ……」

という有名な言葉がある。とにかく、山上の大告白は、5章から7章までは何と言ってもマタイ伝の、ある意味において、ピークですね。一切のキリストの福音は全部、あの中に語られている。

この12節を「黄金律」と言っている。

「律法であり預言者である」

ということとは

「旧約聖書である」

ということとです。「律法」と言いますが、これはただ律法ばかりではない。歴史も相当入っている。サムエル書なんかも全部、「律法」の中に入っているから。「預言者」というと、非常に広い意味で、律法の中にも預言者はいます。とにかく、旧約聖書全体です。あともう一つ、「諸書」という言い方がある。詩篇や雅歌書や伝道の書やいろいろある。しかし、詩篇だけは、

「律法と預言者と詩篇なり」

と言ってもいいくらいに大事なわけで、キリストも詩篇を非常に愛読された。ルターは詩篇のことを

「小さな聖書」

と言ったくらいです。要するに、それが旧訳聖書だと。

「旧約聖書の根本精神は、人にしてもらいたいと思うことをせよということだ」と。そうすると、いったいそれは、究極のところは何だ、ということになるわけです。

● 汝の隣を愛すべし

では、第十巻の「黄金律」(9月19日)のところを読みます。



「それゆえ人々が汝らになさんことをおおよそ願うかぎりのことを、その如く人々になせよ。これこそが律法であり預言者たちである。」(マタイ7:12 私訳)

この句を黄金律といっているわけである。「律法と預言者たち」という表現は、我々キリスト者にとっては旧約聖書ということになる。ユダヤ教徒は旧約とは言わない。彼らの聖書は「律法(トーラー)・預言者(ネビイム)及び(ウー)諸書(ケスビム)」という長い名称である。要するに旧約の根本精神を一言で称うならこうだとキリストが告白なさった。人にしてもらいたいことは何か。具体的にはいろいろある。それを煮つめれば愛せられたいことである。愛せられたいように愛せよ、ということになる。ひとばかりではない、動物をも植物をもそのように愛すると、動物も植物もよろこぶ。

だから、キリストは全霊全力を以て神を愛せよ、また隣人を愛せよ、⁴これは旧約の中にある言葉です。申命記6章です。これはユダヤ人なら、小さい子も誰でも知っている有名なところですよ。「聴け、イスラエル」というところ。

「4イスラエルよ聴け、我らの神エホバは唯一のエホバなり。5汝心を尽くし精神を尽くし力を尽くして汝の神エホバを愛すべし。」(申命記6:4~5)

この申命記6章5節がキリストの言葉のもとになるようなわけです。

そして、「隣人を愛せよ」ということはレビ記19章に出ている。

「汝^{あた}仇をかえすべからず、汝の民の子孫^{むか}に対して怨^{うらみ}を懐^{いだ}くべからず。己のごとく汝の隣^{となり}を愛すべし。我はエホバなり。」(レビ19:18)

「我はエホバなり」

という言葉が、レビ記の19章には節の終りにずっと出てくる。これは非常に大事なことです。

「私がエホバで、お前の神だから、己の如く汝の隣を愛すべし。できるねえ」

と。むしろ、「愛すべし」と言っても、実力の裏付けが

「我はエホバなり」

というこの一句にあるんです。「我はエホバなり」と、ここに全部出ていますから。レビ記19章というのは不思議な大事なところですよ。これがちょうど十誡になっている。「レビ記の十誡」と言ってもいいくらい。13節から数えていくと、「我はエホバなり」というのがちょうど十ある。その前にも、19章の1節から「我はエホバなり」という言葉が四つあるけれども、特に律法のようにして数えるのは、その13節からです。

「これは同じ愛の両面である。そして、それが全聖書の根本精神である。仏教も慈悲に尽きるし、孔子の教えも仁に尽きることをおもえば、要するに愛すること、人助けをすること、人を救いあげることが天道であり人道であるといつことに帰する。提身の、棄身の愛の行為に優るものはない。その極致がキリストの十字架の贖罪愛であった。」



●マキシミリアノ・コルベ神父

ここにコルベ神父について書いてある本があるから、少し紹介します。これはカトリック系の本で「殉教者の歴史」というドイツ語の本です。

マキシミリアノ・コルベ神父(1894～1941)はポーランドの人で、あのアウシュビッツの強制収容所で働いた人です。アウシュビッツはナチスの強制収容所で一番大きい。ユダヤ人ばかりでなく、政府に反抗した者も入れられてしまった。コルベもその一人だった。

コルベのお父さんは旗織人で、お母さんは小さな小間物商をしていた。助産婦もしていた。お母さんは——やはり、偉い人のお母さんは小さな魂がいいね——フランシスコ派の第三教団に属していた。非常に宗教的には魂の深い人であった。コルベさんは日本に数年来ていた。そして、病人や貧しい人たちのために非常に尽くした。神さまの僕が自分の使命であると感じていた。

カトリックですから、マリア崇拝と言いますか、マリア礼拝と言いますか、非常にマリアに対しての献身的な気持ちをもっていった。マリアは無原罪の女性として特別にカトリックでは扱う。彼は「聖母の騎士会」を創立した。

とにかく、その時代精神に対して彼は非常に戦った。それで、当時の世界が、特にドイツがだんだんおかしくなってきた。それで、その時代精神に対して彼は非常に情熱的に反対して、その運動を進めていた。

「正に、心と信仰と聖霊の危機であった」

というような言い方をしています。ところが、いろいろと患難にあつて、肺病にもかかった。2年間ばかりサナトリウムに入ったこともあった。1930年に宣教師として日本にやって来た。

1939年9月19日にドイツで捕まって、牢屋に入れられた。けれども、彼はどこにいても、非常に魂は明るい。むしろ、一緒にいる囚人たちを慰め励ました。二度目は、1941年2月17日にアウシュビッツの強制収容所に入れられた。

アウシュビッツはポーランドの南の方にある工業都市で、収容所はその郊外にある。今は平和記念博物館になっているそうだ。その中の30人くらいのグループに入れられてしまった。もし、脱獄する者があると、今度はその中から10人はすぐ死刑にされる。ところが、一人が逃げた。それで、その中から10人を勝手に選んで、それを処刑する。その10人選ばれた中の或る一人の男が

「自分は妻も子もいるので、とてもやりきれない」

と叫んだ。もちろん、蹴飛ばされた。けれども、それを見て、コルベがそつと小さい声で言った。

「どうぞ、私をこの人の代わりに入れてくれ」

と言った。ごく2、3人の人にしか、その言葉は聞こえなかったという。それで、その人



は助かったから、コルベさんのことをずっと詳しく書いたわけですけども。コルベがその身代わりになった。

●最後のしかし

非常に彼は明るい顔をしている。お母さんへ書いた手紙の一部がここについている。

「私は牢獄にいるけれども、まことに元氣だから心配しないでくれ」

と。彼の言葉にこういうのがある。

「神に『最後のしかし』を献げる。

と。キリストがああゲッセマネの祈りで、

「けれども、私の意ではありません。あなたの聖意に従います」

という、あの「けれども」がこの『最後のしかし』ということ。生命を献げることです。

誰でも自分の内的な生活を最高の充実に到達せしめんとする者は、神さまにこの『最

後のしかし』を

「しかし」と言って自分を否定することです。

献げなければならぬ。このような完全な無制限な犠牲というものは、恵みの生活の

本当の成長のための前提である。たとえ極めて小さい妨げが残っていても、魂は

高揚することができない。

全的な、神に捧げた精神でなければ、本当の魂の生き方はできないという意味です。

もし、そうでないと、魂には自由——それはあの鴿が持っているような自由——な飛

翔が欠けてしまう。」

「鴿」というのは聖霊を譬えた意味でしょうね。鴿は鳥だから、一定の高さの制限はある。

しかし、これに反して、魂にはいかなる限界もない。神との関係において、そのような妨

げのない道を行くならば、もはやいかなる限界もなくなる。神に対しては「否」と言うこ

とはない。自分に対しては「否」と言う。即ち、信仰は神に対する全的な「然り」であって、

自分に対しては全的な「否」である。プラスとマイナスで、これは放電するわけです。こ

れはもう聖霊の力でなければできない。

コルベさんは、飢え死にするところの部屋（餓死監房）に入れられる。だんだん飢えて殺

されてしまう。入ると、コルベさんは非常に明るい顔をしている。みんなが絶望的な顔を

しているのに、彼だけは明るい顔をしている。そして、彼は讚美歌を歌いだす。お話をし

て讚美歌を歌いだすと、みんながコルベさんの気持ちに化せられて、その牢獄では讚美歌の

声が聞こえてきた。ドイツ兵が驚いてしまった。こんなことは初めてだと。だんだん消え

ゆく人たちが、コルベさんのお陰で、本当に天国に往くつもりで仆れていった。コルベさ

んは最後の一人になった。それくらい、聖霊の力が彼に働いていた。

そういう完璧な——これは黄金律どころでない——キリストの十字架の死を身をもって



後からついて行った。

● 霊愛道

「マキシミリアン・コルベ神父がナチスのユダヤ人大殺害の Auschwitz 強制収容所で一死刑囚の生命の身代わりをした愛を想う。

ヨハネ伝の「元始はじめに言葉ことばがあった」とは、実は「元始に愛（の行為）があった」と告白したくらいである。愛こそは神のそして神から来る力のアルファでありオメガである。黄金律はこの霊愛道に極まる。」

（著作集第十巻『聖書は大ドラマである』の「9月19日 黄金律」の項）

「霊愛道」、御霊の愛の道である。律法ではない。とにかく、カトリックのいわゆる神父という方々の中には本当に素晴らしい魂がいます。プロテスタントはむしろ理屈が多いですから、その点はむしろ、こういう人たちに謙虚に学ばなければいかん。

最後に、コルベさんはどういう姿で死んでいたかというところ、ちゃんと片隅に端坐して、目を天の方に向けて見開いていたという。驚くべきことだね。完全に本当の勝利です。

その悪いフリッツ所長に、コルベさんは、

「あの死刑に定められた人の代わりに、私が死にたいと思います」と。すると、その所長は

「なぜか？」

と。コルベさんは、

「私は一人です。けれども、あの人には妻と子がいます」と答えた。

「お前はどのような仕事をしているのか？」

「私はカトリックの司祭（神父）です」

と。しばらく、所長は何も言えず黙ってしまった。

「かくして、この殺人者に対してコルベは勝った。コルベの足並みは実に力強く、とら

えがたきものであった」

と書いてある。あのナチス・ドイツの手下どもは本当に鬼畜にも劣るような悪魔の弟子たちだ。しかし、それに本当に素晴らしい勝利をした。殉道の人たちは、何と言っても、天国で一番高いところにいます。これは、この人は妻子がいるものだから、

「本当に助かりたい」

と欲した。それで、コルベさんはそのようにしてやった。黄金律の完璧な実践をしたわけですね。

キリストが、

「人その友のために生命を棄つる。これより大なる愛はなし」



と言われた。「友」と言ったって、この場合はいわゆる友ではありませんけれども。隣人のために生命を棄てた。「愛する」とは結局、身を献げること、身を与えることです。

●生命がけ

ロマ書13章8節を見ると、

「汝等たがいに愛を負うのほか何をも人に負うな。人を愛する者は、律法を全うするなり」

これは本当は

「人を愛する者は、律法を全うしたるなり」

ですよ。完了でいい。本当に愛すれば、それは全うしたということである。「愛する」という言葉が、ただ可愛がるとか、何とかということではない。キリストの愛を思えば、生命を与える。生命がけでやる。

仕事をするのでも、何でも、「生命をかける」ということがいかに本当のことであるかということ。ゴッホにしろ、絵を描くことに生命をかけているわけだ。要するに、生命がけで何でもやるのが一番本当だ。それは、そのものを本当に尊ぶがゆえに。そうすると、自分の欲ではない。

「してもらいたい」と

とは「愛せられたいこと」。

「愛せられたいことは、今度はそのようにせよ」

と。「愛する」とは、そういう意味で、己を献げることです。それは日々の生活において、その質をもつて生きなくては、いくらそんなことを頭でもって結論を出したって、どうにもならない。そうすれば、本当に人は喜ぶ。人を喜ばすよりも、まず神さまが喜ぶ。

「このいと小さき者になしたるは我になしたるなり」(マタイ25・40)

「小さい者をあなどるな。騙すな。騙したら、首に縄で石臼をつけられて海に

沈められた方がましだ」(マタイ18・6)

なんてキリストが仰った。

●自己教育

そういう角度と、およそ、今の日本の民主主義的な気持の角度が正反対です。人にやってない。みんな、自分勝手のことをやっている。今の若い人たちのいろいろなところを見てみると、本当に思いやりが足りない。人のことを思わないで、勝手なことをやっている。

「こうしたら、迷惑するだろうか」

とか、いろいろなことを思うこともない。これは何も、少年たちが悪いのではない。これは保育園、幼稚園、小学校からの教育が悪い。教育が悪いということは、要するに、その



先生方がなつちやらんということになる。そのようにしてしまったのは、本当は親が、我々が責任者なんだ。今、教育の問題がいろいろあるが、問題は教育者自身にある。制度ではない。問題は親にある、先生にある、というわけです。皆さん方は、本当に、この責任と栄光は重大なんだ。

それから最後が、どんな子供でも、もう少し大きくなれば自己教育ということ。これはヒルティもペスタロッチも言っている通り。自分を教育すること。自らを鍛えあげること。これをしなかつたらダメです。

これはもう本当は中学校あたりから、その気持でいかななくてはいかん。自らを鍛えなくては。中学校、高等学校の生徒は自覚をもって勉強をし、テレビやビデオなんかにつつまを抜かしているうちは、最後は——ちようどギリギリスが夏は歌ってばかりいて、冬になったら食べる物がなくなつた。アリは一生懸命で蓄えていたから、冬も大丈夫だと——イソツプ物語と同じことだな。大いに遊んで結構です。ただ、本当に学ぶということが土台になっていないで、遊んでいたつてダメです。

そうすると、学ぶということが楽しくなる。これはまた、何でも楽しいんですよ。楽しみが伴う。楽しみを求めるのではないけれども、楽しみが伴う。それがうれしくてしようがなくなくなる。どんなに難しいことでも楽しくなってくる。そうしたら、本ものになる。

私は自分でも経験しているもの、正直。英語の勉強も、大事な句だの文章だのをちゃんとして書いて、私は道すがらそれを読みながら歩いたことを覚えている。何でも、やっているうちに、面白くなつて楽しくなる。だから、是非、大人であろうと子供であろうと、生命を打ち込んでやれば、それは楽しくなる。「エンジョイ」という言葉があるけれども、「エン」は「イン」ですから、「ジョイ」（喜び）の中に入ること。「エンジョイ」というのは、楽しくするということ。自分を楽しませる、楽しくなる。

● 暖かい楽しい思ひ出

小さい時は、本当に天国的な状況を与えておかないと、その人間は非常に人格的に、或る温かさが欠けるです、ヘタすると。これはヒルティが言っているとおおり。

私は思い出します。私は小学校の5年生のときに、私の兄貴が、この亡くなった兄貴（政美）が——その頃は西片町に住んでいましたが——

「辰雄、今日は教会のクリスマスへ連れて行ってやるよ」

と。あそこの本郷の有名な教会です。クリスマスに連れて行ってくれた。今でもはつきりと目に浮かびます。二階の真ん中くらいのところに兄貴と坐った。そうすると、

「聞けや、聞けや」

という歌を小さい人たちが合唱した。その声まで今も耳に残っている。非常に楽しい思い出です。私はたった一回だけでも、このクリスマスの思い出が、暖かい楽しい思い出です。



小さい時には、そういう楽しさというものを与えることです。それから、きれいな英語の本を神田で買ってもらって、これが私はうれしくてね、もう、その絵までちゃんと浮かんでくる。私の家は貧乏でしたから、どうせそんなにものは買えなかったけれども。そういうのが非常にいい天国的な印象に残っている。

我々はもちろん、十字架道を歩く覚悟をもって生きる必要があるが、小さい人には始めから十字架道を与えてはダメだ。小さい人は、本当に喜びの世界を与えておかないとね。ただ甘やかすということではないですよ。ちゃんと、硬軟よろしくを得る必要がありますけれども。そういう楽しいクリスマスでした。

だから、私は今度は——「だから」ということもないけれども——栃木の方々には、

「あなた方は、普段なかなか集まれないこともあるようだけれども、クリスマスくらいは、みんな集まって楽しくやりなさい。こつちに来ることはありませんよ。ペンテコステとか、復活節とか、そういう時には大いに来てください。けれども、クリスマスはどうぞ、そちらで楽しくやってください」

と、私は昨日の晩に電話をかけてやった。O君は

「ありがとうございます。では、そうします」と喜んでいた。

それから、M君が暮れから正月にかけて小諸で一週間、連続の集会をするようなことを私に言ってきた。私はすぐ電話をかけた。

「私は反対だよ。ダメだよ、君。君のその気持は分かる。けれども、暮れ正月の、クリスマスからずっと家庭的な温かさを、特に君には男の子が三人いるんだろ、子供たちにはいい楽しい印象を与えてやってくれ。とかく、伝道者の家庭は、そういう意味において、反対になる場合が多い。だから、気をつけろ」

と。私自身も、その点でかなりマイナスのことをして、今の子供たちに申し訳なかったと思いますけれども。そうしたら、

「分かりました。取り消します」

と。それから、あとで手紙でも詳しく書いてやりました。僕の他にそういうことをピシャと言う人がいないから、仕方がない。奥さんも喜んだらしいな。M君はハッスルして、そんな計画をしたんだね。

「短距離走でぶっ倒れたら、先生、私の葬式をお願いします」
なんて、言ってきたから、

「冗談じゃない。短距離ランナーになるな。人生のマラソンをやれ。あなたは子供たちがいて、責任もある。気持は分かるから。もちろん、やる時には大いにやってもらいたいだが、『よろずのこと時あり』だから」

と言ってやった。そういうようなわけで、彼も思いとどまった。



●三つの畏れ

今日は、その黄金律の最も素晴らしい例として、コルベ神父のことを皆さんと学んだわけです。

孔子の言葉におもしろい言葉がある。論語を読み返す必要があるくらいだな。

「孔子の曰わく、君子に三畏あり。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。小人は天命を知らずして畏れず、大人に狎れ、聖人の言を侮る。」(論語第八卷季氏第十六)

三つの畏れがある。「天命」を畏れ、「大人」を畏れ、「聖人の言」を畏れる。「畏れ」というのは、畏れかしむことで、こわがることではない。敬い、そして平伏してかしこむ。畏敬と言うね。一番先に、やはり

「天命を畏る」

と言っている。中国の思想には、この「天」という言葉が、絶対者に対することを、宇宙の大霊に対することを「天」と言う。「天命を畏る」とは天命にこれ従うことです。

「大人を畏る」

君子の中の立派な人を「大人」という。それに敬意を表する。

「聖人の言を畏る」

これは我々で言うと、聖書の言を畏れることだ。そして、ただ畏れるばかりでなく、畏敬ばかりではなくて、その中に自分を本当に乗っけていかなければなりません。そこが道徳の限界でしょうけれども。

とにかく、私も来年からは正直、生命がけでやります。年賀状にも書いた。

「もう、会合は大体において失礼するから」

と。D大学のも、D中学・高等学校の新年宴会も両方とも断った。

「**鎌に手をつけて後ろを顧みるものは**」

とキリストが仰った。これは本当に冗談じゃないよ、今度の仕事は。それでかかって行きます。

しかしながら、皆さんと集会はやりませ、仆れるまで。集会は私にとつても、あなた方にとつても、これは原動力だからね。原動力を失つたらしようがないんだ。集会には万難を排して来てくださいよ。どうも、だいぶ欠席がちな方がいらっしやるが、どうしているかなあと思うね。



(参考)

『黄金律』(マタイ7・12)

——「エン・クリスト」第14号(1983年5月春期号)

「さればすべて人々が汝らに為さんことを汝らがおよそ欲する如く汝らもまた彼らに為せよ。まことに是れは律法にしてまた預言者なり。」(私訳)

「されば」という理由づけは、前段に

「求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。……天に在す汝らの父は求むる者に善き物(聖霊)を賜わざらんや」(マタイ7・7:11)

があるからである。即ち神さまは我々が欲するものを与えてくださる。

「されば(だから)我々も、自分がしてもらいたいと思つたら、そのようにひとにもしてやりなさい。このところが即ち律法の本質であり、預言者たちの

精神でもある」

とイエスは論し給うた。「律法と預言者」という表現は、旧約聖書の根本精神である、という意である。

「モーセの十戒」を見ると、「ロー」という否定詞が八個もあつて積極的な情意的な願望を肯定し、勧告していくような言はない。律法の中で積極的なものとなると、レビ記19・18の、

「己の如く汝の隣人を愛すべし 我はエホバなり」

である。これがイエスの心の中にあつたに相違ない。しかしこの言葉の前半は己れを愛すること、これが人間の本能であり、またエゴイズム(利己主義)と同質的なもので、我執が罪の罪たる所以である、

「万人は罪びとであつて、義人は一人も居ない」

というパウロがクリストの義で救われた告白がある所以である。だから、その本能的な自己愛が自然であるように隣人を愛することが自然であれ、という意である。ところがこの愛を完璧に実践することも不可能である。

律法といつても、愛することは、また愛せられることは、人間存在の最も望まじき、最も美しい在り方である。であるから、

「愛(アガペー)は律法(ノモス)の充満(プレローマ)である」(ロマ13・10)

とパウロがいみじくも喝破した。この愛は自己愛と正反対の愛で、おのれを棄ててかかる愛、人助けの愛、荷いの愛、犠牲的精神の愛である。南洲もこう言った、

「総じて人は己れに克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るるぞ」

と。クリストは言った、

「おのれを憎まずばわが弟子となること能わず」



と。また

「己が生命(プシユヘー)を愛する者は、これを失い、この世にてその生命を憎む者は、これを保ちて永遠の生命に至るべし」

「おのれを棄て、日々おのが十字架を負いて我に従え。己が生命(プシユヘー)を救わんと思う者はこれを失い、我がためにおのが生命を失う者はこれを救わん」

と。ところで、

「ひとにしてみらいたいこと」

という本題の前提は、無条件に言われている。イエスの言はすべて無条件的である。日常生活ではさまざまな内容が考えられるが、要するにそれは、ひとからの好意である。一言で言えば愛である。愛の内容は多種多様であるが、後半は要するに、

「そのようにひとにしてあげなさい」

ということだ。「ひとを愛しなさい」ということである。愛することはひと助けである。そしてそのどん底の相は、^{すがた}棄身でひとを、隣人を助けよ、救えよ、ということである。

律法の根本精神は「すべし、すべからず」といった命令や禁止ではなく断言であり、勧告である。「汝殺すなかれ」ではなく「汝は殺人はしない」という神が我らを信じての断言である。神はその似姿に人を創造したとは、人間を本質的には同質に創造したことから、人を信じて「殺人はしない」と断言しておられるのである。隠れたる、信愛関係なのである。親子関係が信愛に基かず、命令と禁止であるはずはない。況んや神と人との関係に於ておやである。

次に「預言者たちである」とは何か。それはとりわけ預言者ホセア、エレミヤ、第二イザヤ、第二イザヤなどを念頭に置いてキリストは言われたにちがいない。彼らは愛を強調した。イザヤ書第53章がその頂点である。

さて自己愛も、神のものとして自己の存在と使命を自覚してのものならそれは義しいことである。ところが人間はそのように在ることから落ちた。これがアダム・エバの樂園喪失の神話が示しているところで、この原罪を現在も各人が繰り返している。

では隣人愛はどうしたら可いのか。

「私が十字架でおまえの自己愛、我執、罪を完全に贖ったから、そして復活昇天の後、聖霊を遣わしたように、おまえに聖霊を与えて力と生命を与えたから、この聖霊にこもっている力強い愛で、隣人を愛しなさい。それはおまえにできる！ み霊の私が、私のみ霊がおまえに宿っているから」

と主は力ある愛の裏づけを以て勧告し給う。我々は躓いても転んでも倒れてもなおこのエン・クリストの現実で、この愛で生きて行く！ この黄金律は、もつと的確な名称、霊愛、道と道いたい。これは律法と預言者の成就、キリストの福音である。

